HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古代中國における「意象」に關する研究
Author(s)	凌, 玲
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16977号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16977
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99821
Type	doctoral thesis
File Information	Ling_Ling_summary.pdf, 全文の要約

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　凌　玲

学位論文題名
古代中國における「意象」に關する研究

本論文は、先秦から南朝梁代に至る中國思想の展開の中で形成された「意象」という思惟構造に注目し、その成立・発展・変容の過程を思想史的に明らかにすることを目的とするものである。

・本論文の研究背景

中國思想において、「言」と「意」の不一致、つまり「言」は「意」を完全には表現できないという問題は、古くから繰り返し論じられてきた。『周易』繫辭上傳に見える「書不盡言、言不盡意」という命題は、その代表である。この問題に対し、古代思想家たちは、言語の限界を補う媒介として「象」という概念を導入した。「象」とは、具体的には卦象・物象・形象などを指し、不可視の意を可視化し、他者と共有可能にするための手段である。本論文が扱う「意象」とは、この「意」と「象」との関係から生まれた思惟構造であり、その原点は『周易』繫辭上傳における「立象以盡意」という発想に求められる。

・本論文の研究方法

本論文は、中國における先秦時代から南朝梁代に至るまでの思想的展開の中で用いられた「意象」という表現に注目し、主に『莊子』『周易』『論衡』『文心雕龍』等の文獻を對象としつつ、「意象」という概念の淵源や成立から展開、さらに變容への過程における思惟構造と意味内容について、多角的に考究したものである。具體的には、①『論衡』亂龍篇における「象類」と『莊子』齊物論篇の概念との關係性について、②『論衡』における『周易』の「意象」原理の導入と活用について、③『論衡』亂龍篇に見える王充の「意象」觀と「禮」との關係性について、④『論衡』および『文心雕龍』における「意象」の意味と用法について考察するとともに、歷史學者、錢穆の『先秦諸子繫年』における四分類を參考にしながら、「意象」に關して、①の内容は種苗段階、②のそれは萌芽段階、③のそれは形成段階、④のそれは變化段階に位置づけられることを明らかにしている。

・本論文の内容

序章では、本研究の背景と目的、方法と範圍、構成と内容について、簡潔に記述している。

第一章「『論衡』亂龍篇における「象類」について―『莊子』齊物論篇を手がかりに―」では、先秦・兩漢時代に見える「象類」という表現が象徵的な用法を有することを確認した上で、とりわけ『論衡』亂龍篇に見える「象類」は、未知から既知への推論を目的とするものではなく、ある事物を別の事物に假託することにより象徵的な意味を與える表現として理解されていたことを論述している。また、その表現は『莊子』齊物論篇の「以指喩指之非指、不如以非喩指喩之非指（指を以て指の指に非ざるを喩すは、指に非ざるものを以て指の指に非ざるを喩すに若かざるなり）」という文章に示された概念と實物との乖離をめぐる認識と通底することを指摘している。さらに、『莊子』では、言語と實物との乖離が否定的に捉えられたのに對して、『論衡』では、その乖離を前提とした上で、概念を「禮」の實踐へと接續し、象徵の實效性を肯定した、いわば認識論を展開するといった特色が認められることを指摘している。

第二章「『論衡』に見える『周易』の意象原理について」では、そもそも『周易』は、あらゆる現象を陰陽の二氣の生成變化によって起こるとし、それを六十四卦という圖象で表現するものであるが、『論衡』における王充の『周易』解釋は、道家の無爲思想に立脚しながら、黄老思想の説をとりいれた點に特徵があり、それが『周易』理解の基本的な態度であったことを明らかにしている。また、王充は、『論衡』亂龍篇において、『周易』繫辭上傳の「立象以盡意（象を立てて意を盡す）」という文章を踏まえつつ、言語のみでは表現しきれない「意」を「象」によって還元する「意象」原理を導入して「意象」という表現を使用したことを論證している。

第三章「王充の「意象」觀―亂龍篇・遭虎篇・商蟲篇を中心に―」では、『論衡』亂龍篇・遭虎篇・商蟲篇における事例への檢討を通して、土龍・虎・蟲に附與された「意象」の意味内容について、王充の判斷と態度を考察するとともに、王充は、「意象」の判斷基準として「禮」を使用したこと、また、これが『論衡』全體を貫く「疾虚妄（虚妄を疾む）」という主旨と密接に關わること、さらに、王充は、「禮」に拘泥したがために、虎・蟲の有する文學的意義を必ずしも重視しなかったことを論述している。

第四章「『文心雕龍』における「意象」―『論衡』との關係性を中心として―」では、『論衡』と『文心龍』とは、内容上から見て性格を異にする書物であるが、『文心雕龍』の文學理論は『論衡』に見える文學關連の議論から一定の影響を受け、それを展開していることを指摘している。この視點に立てば、兩書の「意象」は、繼承關係にありながらも、『論衡』では、王充が「意象」を「禮」の象徵と位置づけたのに對して、『文心雕龍』では、「意象」が文學創作論上の表現に轉化されるなど、その意味と用法が少なからず異なることを明らかにしている。また、漢代は、「禮」を重んじ、「詩言志（詩は志を言ふ）」という考え方を基本とし、そこでの「意象」が民の教化を擔っているのに反して、六朝時代では、玄學思想の風潮を受け、「詩緣情（詩は情に緣る）」という文學觀が主流であり、それが『文心雕龍』の「意象」理解に色濃く反映されていることに言及している。

終章では、本研究における各章の要點と結論がまとめられている。

まず、第一章でとりあげた『論衡』における「象類」という表現は、象徴的認識論というべきものであり、その思考法は『莊子』齊物論篇中に見出すことができることを示すとともに、それこそ、「意象」という概念の種苗段階に相當すると述べている。次に、第二章では、『論衡』に見える王充の『周易』思想への考察が行われ、『周易』繫辭上傳の「立象以盡意（象を立てて以て意を盡す)」という一文だけでは表現し難い「意」の意味について、「象」という語を借りて「意象」という表現を使用していること、ただし、王充は、「禮貴意象（禮は意象を貴ぶ)」というように、「禮」の象徴性を重んじていたことを明らかにした上で、それが「意象」の萌芽段階に合致するという。

また、第三章では、『論衡』亂龍篇・遭虎篇・商蟲篇をとりあげ、王充が「禮」を重要視したことにより、土龍の「意象」には肯定的な態度が認められる一方で、虎・蟲の「意象」には否定的な態度がとられたことを論述するとともに、その内容は、「意象」の形成段階に該當するという。

最後の第四章では、『論衡』と『文心雕龍』における「意象」を比較検討し、前者では、時代背景から「禮」を重んじられたのに對して、後者では、玄學の流行を受けて、感情や美的價値を追求する表現形式として確立されたことを論述した上で、その「意象」の概念は、變化段階と呼稱できると結んでいる。

以上、本論文は、「意象」を言・意・象から成る思惟構造として捉え、その形成と展開を四段階に分けて考察した。その結果、「意象」とは単なる美学用語や心理的イメージではなく、言語の限界という根源的問題に対する中国思想の応答として形成された概念であることが明らかとなった。近代以降、「意象」は美学・文学理論の術語として定着したが、その過程で本来の思想的背景が単純化される傾向が見られる。本論文は、その原点へ立ち返り、「意象」を思想史的構造として再定位した。

附論では、『論衡』の特に恢國篇・講瑞篇・宣漢篇・驗符篇において、王充が引用した資料をとりあげ、『漢書』『後漢書』等の正史の文章との比較検討を通して、その兩者の間に齟齬が認められることを指摘した上で、その要因は、王充の誤用や誤記によるのではなく、その人獨自の選擇と解釋が反映された結果であることを證明している。この附論の考察は、本論文各章における考證内容を間接的に補強する役割を果している。